

序

『シン・ゴジラ』を観た。

圧倒された。

何か、凄まじいものを観たという印象だった。

東日本大震災を想起させる映像。

リアリテイ。

迫力。

恐怖。

絶望。

なにより、ゴジラの崇高さ。

口から真っ赤な火を吐き、レーザーを発したゴジラの、神々しいまでの美しさ、破壊された東京を観る、絶望的な陶酔。

後半、日本政府が攻勢に転じた場面で、ぼくはなぜか、ゴジラを応援していた。

もっと壊せ！ もっとぶち壊せ！ やれ、ゴジラ！

この世界の全てを焼き払え！

日本政府、ゴジラをボコボコにするなんて何を考えているんだ！

ゴジラをいじめるな！

やり返せ！ ゴジラ！

……この見方が「特殊」だと知ったのは、随分とあとのことになる。

国会前でデモをしていた若い世代ですら、日本政府側に感情移入して応援していたというのだから！

ゴジラの立像がある、歌舞伎町のT.O.H.O.シネマズで映画を観た。

映画が終わったのち、会場から万雷の拍手が起こった。舞台挨拶やトークショーがあったわけではない。

映画そのものに、自然と観客が拍手したのだ。

そんなこと、なかなか起こらない。

映画そのものに拍手を送る（監督やスタッフがその場にいるわけではない）ほどの熱狂が劇場にあった。

ぼくも、映画に興奮し、熱狂を共有し、拍手しながらも、頭の中に、どこか冷めている部分があった。

この映画にほんとうに喜んで良いのか？

日本政府と自衛隊が勝つ映画に拍手を送るのはどうなんだろう？

重工業、製造業が強かった時代の日本をあまりにロマンチックに描いていないか？

危機に際して「一体感」を集団が持つ。過労死しそうな環境で働くこの映画の現実の労働に対する効果はどうなんだろう？

カタルシスを感じさせるこの映画のスペクタクルは、実際の震災の犠牲者や被害者に対する共感を失わせる効果がないか？

その疑問は、どれだけの『シン・ゴジラ』論を読んでも解消されない。

だから、自分で考えることにした。

震災の記憶を昇華するエンターテインメントの是非

ぼくの胸に一番引っかけたのは、東日本大震災という現実に対し、このような虚構をぶつけることの意味である。

『シン・ゴジラ』のスペクタクルの快は、ぼくらが実際に体感し、メディア越しに観た東日本大震災の記憶と結びついている。

多くの者が語ることを「倫理的」にタブーにしているが、二〇一一年三月十一日、東日本大震災による津波の破壊の映像、燃え盛る沿岸部の映像、爆発する原発の映像にも、「スペクタクル」の快はあった。

二〇一一年三月十一日のSNSには、そのような喜びと感動の声がたくさんあったのをぼくは覚えている。

その後、その言葉は「不謹慎」との声に、削除されていった。「死者」、「犠牲者」への想像、倫理的な反省はあとから訪れる。しかし、映像そのものの「スペクタクル」の快はどうしても感じてしまう。この二つは、人間の脳が対象を認識する際の時間差に由来するものである。

『シン・ゴジラ』は、震災や巨大な破壊そのものを悦びとして観てしまう快樂と、そのことに対する倫理的な反省と罪悪感の相克に、作用しているように感じられた。

この二重化そのものの、解きほぐしがたい精神のしこりを、『シン・ゴジラ』は、解消してくれた。カタルシスを得させた。

それは、気持ちいい。

だけれど、何かが見えなくなるかもしれない。

持つべき感情、直視すべき何かを、見えなくしているかもしれない。

似た問題は、二〇一六年に大ヒットした新海誠監督のアニメ映画『君の名は。』にもいえる。

一二月六日の東宝発表によると、『君の名は。』の興行収入は二〇〇億円を突破し、歴代邦画ランキングで二位になった。宮崎駿監督作品で言えば、『崖の上のポニョ』、『もののけ姫』、『ハウルの動く城』を超え、上には『千と千尋の神隠し』しかない。

『シン・ゴジラ』は、東宝の発表によると一二月一六日までで、興業収入が八〇億円を突破。観客動員は五五一万人を超えたという。

どちらも途方もない数字である。

何故二〇一六年に、震災を想起させるエンターテイメントがこれほどヒットしたのか？ 震災の経験を心理的に「昇華」させたい人々がこれほど大勢いたからこそ、これほどの「国民的」ヒットとなったのではないか？

ぼくは、虚構と現実の関係について、改めて考え込んでしまった。

エンターテイメントが必要とされる理由も分かる。人はありのままの現実を見続けられるものではない。特に、悲惨な現状ではそうであろう。

これまで、震災後文学を読み続け、被災地を扱ったドキュメンタリー作品などを観続けたが、人間や制度、自然や世界の残酷さ、不条理さに気が滅入り、自身や人間の無力さに打ちひしがれることばかりだった。確かに、そればかり観ていたら、鬱になる。だから、時々、それを忘れさせるエンターテイメントが必要だという気持ちも分かる。

実際に、ぼくだって、それらが必要なのだ。

しかし、その幻想は、同時に、現実や実際に存在する悲惨を覆い隠してしまう。覆い隠された中にいる人々の苦しみは、見えなくされる。その苦しみにも、無感覚ではいられない。

厄介なことだ。

戦後日本の新たな「神」としてのゴジラ

人間の精神が自分を守るために虚構を作るのは、避けられないことなのかもしれない。

エンターテイメントによって、現実には直面する気鬱から身を守るのは、少なくとも、大衆文化においては、「生きる」ための必然から正当化されるのかもしれない。

現実の過酷さや悲惨さに耐えられるように人間の精神に影響を与える虚構に対して、伝統的に与えられてきた名前がある。

「宗教」である。

どうやら、戦後、そして、震災後の日本では、宗教はサブカルチャーに代替されているようである。

日本社会は〈ゴジラ〉という名前の「神」をなぜ必要とするようになったのか？

震災後の今、なぜもう一度必要になったのか？

〈ゴジラ〉という虚構の光源から、それらの虚構を生み出した日本社会を照らせば、その角度から見える別種の光景が見えてくる。本書は、その光景の意味を探究する。

その光景は、ぼくたちが生きてきた過去、そして生きていく未来を考える上で、どうしても必要なものだ。

本書の構成

第一章「ゴジラ対3・11」は、政治家や霞ヶ関の官僚、軍事や建設の専門家などの『シン・ゴジラ』評を検討する。彼らが、虚構と現実を結び付けていたり意図的に混濁させたり、むしろ切り分けたりするその「反応」を分析することで、「現実対虚構」^{ニホンゴジラ}とキャッチコピーが付けられた『シン・ゴジラ』の性質を理解する。明らかになるのは、この作品が単なるエンターテイメントとしてではなく、政治的機能を持つ

た作品として機能していることである。

第二章「ゴジラ対天皇」は、従来のゴジラ評論で主流であった、一作目のゴジラは、第二次世界大戦の死者たちであり、皇居に向かってきたのだとする、「ゴジラ死者説」の系譜を検討する。天皇とゴジラはどのような関係にあるものと読まれてきたのか。第二次世界大戦と戦後日本社会において、どのような象徴として受け取られてきたのか。そしてそれは、震災後に作られた『シン・ゴジラ』とどのような関係を持つんでいるのかを検討される。

第三章「ゴジラ対メタゴジラ」は、映画の中のキャラクターとしての〈ゴジラ〉を、一段階引いた目で検討する章である。様々な解釈を引き寄せ、無数の象徴に「なりすぎる」性質を持つキャラクターとしての〈ゴジラ〉という、虚構の中の存在の特殊性を分析する。本章後半では、「かわいい」化されるゴジラや、BL化されるゴジラなどを扱う。読み替えにより、ゴジラの暴力性を性的に「解釈」することで飼いや慣らそうという試みの意義を検討する。結果として、戦後のゴジラがシリーズ化に従って、衛生化・無害化され、その結果、サンリオやポケモンが生まれたという戦後日本キャラクター史の再検討が本章では行われる。

第四章「科学対物語」は、ゴジラシリーズ全作品を、『シン・ゴジラ』という新しい視座のもとに読み直す試みである。『シン・ゴジラ』はあまりに一作目の『ゴジラ』とばかり結びつけて論じられてきたが、それが明らかな間違いであることが、本章で証明されるだろう。『シン・ゴジラ』は、平成シリーズ、ミレニアムシリーズの遺伝子を明らかに継いでおり、一作目から続く「科学」の悪循環というテーマを適切に引き受けた作品であることが本章で示される。

第五章「神対罪」は、戦後日本社会において、失われた「神」である天皇や「無常」などの宗教観ではなく、〈ゴジラ〉という神が無意識的に必要とされたことの意味を検討する。〈ゴジラ〉という思想、〈ゴジラ〉という倫理を、戦後日本社会が持とうとしたことの意義は大きい。震災後、戦争の予感すらしている現在において、ぼくたちが何を失ってはいけないのか、何を怖れるべきなのか、そして、何を継承するべきなのか。『シン・ゴジラ』への最大の懸念を批判しつつ、最大の可能性をも取り出す試みをする。

第B章「〈笑い〉の逆襲」は、補論である。〈ゴジラ〉という「神の影」が支配してきた戦後日本社会に挑もうとした二人の映画監督、北野武と松本人志の「怪獣映画」を検討する。不当に評価の低い彼らの「怪獣映画」を理解する新しいパースペクティヴが、本書で初めて明らかになる。

「虚構は虚構」、「現実」は現実」と、単純に切り分ける態度は、エンターテイメントが政治的に利用され、政治がエンターテイメント化している現在、通用しない。

なにしろ、映画の悪役のようなドナルド・トランプが本当にアメリカ大統領になってしまう時代である。彼は映画にも出演し、リアリティ番組のプロデューサーとしても成功してきた！ 現実の政治すらもはやリアリティ・ショーになってしまっているかのようである。もはや戦争も、「リアリティ」をめぐる戦争、「リアリティ・ウォー」の様相を呈してきた。

輻輳し、多層化し、混濁しているその状況を、丁寧に腑分けしていく作業を行うことが、より良い未来を引き寄せるために必要なことだと、信じている。

この論が、その助けにならんことを。